



—連載（第45回）—

ロンドン証券取引所におけるチャリティ活動等について

■ 1. はじめに

英国における新型コロナウイルス・パンデミックの影響は、既に2千万人を超える英国市民に対して、ワクチン注射の接種が開始されるなど、先行きの期待される状態もみられるところだが、こうした中においても2021年3月8日現在、死者数は約12万人、感染者数は約4百万人を記録するとともに、英国における国民皆医療体制を提供するNHS（国民健康サービス）では、受入患者の収容キャパシティがほぼ上限となる状況も続いてきたところである。

こうした中、英国では昨年、「キャプテン・トム」の名称で愛されるトム・ムーア（Tom Moore）退役軍人による、NHSへの募金活動が話題として大きく取り上げられた。英国における、募金活動などをはじめとしたチャリティ活動は、日本と比較しても、かなり活動の裾野が広がっていることから、今回は、

こうした動向について、ロンドン証券取引所におけるチャリティ活動等を中心に紹介を行うこととしたい。

なお、本稿に記載した内容はすべて筆者個人の見解であり、筆者の所属する組織としての見解を示すものではないことをお断りする。

■ 2. トム・ムーア氏による募金活動

ムーア氏は1920年生まれで、第二次世界大戦中は、陸軍大尉としてインドやビルマ戦線などに赴き、戦後はコンクリート会社のディレクターとなり、レーサーの経験までであるという。本年2月に新型コロナウイルス感染により死去する直前まで、歩行時には家族の支えや杖に頼る必要はあったものの、ロンドン郊外において娘夫婦とその孫とともに過ごし、今回の募金活動が脚光を浴びる前までは、英国内においても知名度は低かったようであ

る。

このムーア氏だが、英国にロックダウンに伴う外出禁止命令が発動された昨年3月下旬に、自らも医療従事者に対する何かしらの貢献を行いたいと、1か月後に100歳の誕生日が到来するのを前に、歩行器を利用しながら自宅の庭を100周するとの目標を立て、賛同者から集まった募金をNHSに寄付する活動を開始した。当初の目標金額は1,000ポンド（日本円換算約15万円）。これが、ソーシャルメディアや報道等を通じて大きく取り上げられるようになり、最終的には当初の目標金額を大幅に超え、驚くことに約150万人から約3,300万ポンド（日本円換算約49億円^{（注1）}）もの募金を集めている^{（注2）}。この募金額は、NHSに対する一般個人からの募金額としては、歴代トップに躍り出るとともに、ギネス記録にも残るほどだという。

この募金活動には、英ロイヤル・ファミリーのウィリアム王子とキャサリン妃も参加しており、英国市民からはムーア氏に対して「ナイト」の称号（勲章）を付与する要望活動まで開始され、その後も40万人以上の賛同署名とともに、2020年7月17日にはエリザベス女王からナイトの称号授与を受けている。このほかにも、英国内のロイヤル・メールの切手のデザインになるとともに、ムーア氏への応援歌も英シングルチャートの週間売上高第1位を記録し、さらには、100歳の誕生日（4月30日）には、エリザベス女王からの感謝状とあわせ、ムーア氏の出身元である英陸軍か

Tom Moore氏



（出所） Captain Tom Moore Twitter

ら「名誉大佐（カーネル）」の称号まで付与されている。

■ 3. ロンドン証券取引所 (LSEG) におけるチャリティ活動

前述においては、新型コロナウイルス・パンデミックが発生する中、英国市民に大きな勇気を与えたトム・ムーア氏による募金活動の紹介をしたが、英国にいと、チャリティ活動というのはよく耳にするとともに、街中を歩けば、チャリティショップなども多数存在している。英国のチャリティ活動については、本コラムで紹介できるほどの体系的な知識を有してはいないものの、英国において直近1、2年間のところで耳にした話題を紹介すると、英イングランド銀行（BOE）は、デ



デジタル支払い方式の普及に伴う硬貨発行の見直し検討に際して、1セントと2セントの両コインを廃止する方向でコンサルテーション・ペーパーを公表したものの、これらの両通貨は、チャリティ文化の根付く英国社会には必要との意見が寄せられたこともあり、両通貨は当面存続することが決まっている。

こうしたチャリティ活動に対する取組みは、英国の企業活動にも大きく根付いている。一例としてロンドン証券取引所（LSEG）における動きをみると、LSEGには、従来から「LSEG Foundation」という基金があり、様々なチャリティ活動が行われている。そして、LSEG Corporate Sustainability Reportによると、2019年には、チャリティ支援先に対して1.4百万ポンド（日本円換算約2.1億円）の募金等が実施されている（注3）。以下では、LSEGにおけるチャリティ活動について、簡単に紹介することとしたい。

図表は、LSEGのウェブサイトに掲載されているLSEGによるチャリティ支援先一覧（抜粋）である（注4）。

図表によると、LSEGにおけるチャリティ活動は、かなり広範囲の分野をカバーしているように見えるところだが、LSEGとしては、こうしたチャリティ支援先等に対する方針などはあるのだろうか。

この点に関しては、LSEGが実施するチャリティ支援先については、前述のCorporate Sustainability Reportによると、「LSEG Foundation Committee」という機関が決定

しており、同機関からは、2019年以降の中長期的なチャリティ活動方針等に関して、「Strategic priorities for 2019-2022」が取りまとめられている。それによると、LSEGのチャリティ支援先については、①若者を中心とした潜在的能力が発揮される活動、②若者に対する労働市場へのアクセス促進を目的とする活動、③若者に対する起業家支援活動、といった方針に沿ったチャリティ支援を優先的に実施するとの記載がある。また、③の起業家支援活動に関しては、LSEGによる活動サポートに加えて、LSEGが提供中（当時）の新興・成長企業向け支援サービスであるELITEプログラムとも関連させた活動が行われている。

このほか、図表によると、LSEGの活動は、シティ（City of London）に拠点を置く主要企業の1つとして、シティ内で実施される主要イベント等へのサポート活動も行われており、例えばロードメイヤーの交代式典（例年は毎年11月に実施）へのサポートや、LSEG本社オフィスビルに隣接するセント・ポール大聖堂におけるチャリティ活動等が行われている。

LSEGのCorporate Sustainability Reportには、このほかにもチャリティ方針を実施するうえでの基金の概要等についても記載がなされている。

それによると、まず、「LSEG Foundation」の原資（資金の出元）をみると、主に4つの分野から構成されている。具体的には、①



(図表) LSEGにおけるチャリティ支援先 (英国分のみ・一部抜粋 (注5))

<ul style="list-style-type: none"> • The Children's Trust • Rainbow Trust Children's Charity • The Hackney Carriage Drivers Charity Trust • The Sick Children Trust • Olivia's Vision • Body & Soul • Barts and the London charity • London's Air Ambulance • JustDifferent • Westminster Boating Base • Coram • Friendship Works • Bright Ideas Trust • Prince's Trust • Siblings Together • Fare Share • Broadway Homelessness & Support • Mines Advisory Group • St Paul's Cathedral • Lord Mayor's Show • The Golden Company • The City of London Arts Trust Limited • Jewish Care • The French Institute • ラグビー・チャリティ・イベント 	<ul style="list-style-type: none"> • 小児・若者障害者向けチャリティ • 終末医療を行う子供やその兄弟・姉妹向けのチャリティ • ロンドンの病院に入院する小児患者のバリ・ディズニーランド訪問をサポート • 王立ロンドン病院の集中治療室に入院する小児の両親宿泊先等に対するサポート • ぶどう膜炎患者向けチャリティ • 若手HIV患者に対する教育支援チャリティ • London Trauma Centreに対するサポート • 航空医療隊による緊急医療等に関するチャリティ • 障害者が提供する教育機材等を用いた支援チャリティ • 生活に恵まれない子供等向けチャリティ • 起業家活動サポート • 若者失業者向けサポート • サポートを必要とする若者とその家族間の団結をサポート • 食料廃棄物の削減に関するチャリティ • 路上生活者等向けチャリティ • 武力衝突地域における社会的弱者向けチャリティ • LSEGに隣接するセント・ポール大聖堂の神学・音楽・教育活動をサポート • ロードメイヤーの交代式典をサポート • ロンドン市内のハチミツ栽培を行う若者向けサポート • ユダヤ人コミュニティにおける健康・社会的ケアをサポートするチャリティ • ロンドンに所在するフランス文化会館の図書館リニューアルをサポート • UNICEF等への寄付
--	--

(出所) LSEG FoundationウェブサイトをもとにJPXロンドン駐在員事務所作成

LSEG社員からの募金（1人あたり最大2,000ポンド（日本円換算約30万円）／年）、② Foundation Day（LSEGにおいて独自に設定）におけるLSEG傘下の取引所（ロンドン証券取引所・Turquoise・Borsa Italiana）における株式取引手数料の合計（注6）、③LSEGグループ会社からの募金、④LSEGが取引参加者等から徴収した違約金、の合計額となっており、①から④までを通じて集金されたすべての資金が、「LSEG Foundation」に集約され、チャリティ資金の原資となっている（注7）。LSEG Foundationへの入金額をみると、直近のところでは1.1百万ポンド（2017年：日本円換算約1.6億円）、1.2百万ポンド（2018年：

同約1.8億円）、1.6百万ポンド（2019年：同約2.4億円）となっている。

LSEGによるチャリティ活動は、こうした金銭提供のみならず、LSEG社員による直接参加による形態も行われており、LSEGとしての数値目標（20%Target）も掲げられている。前述のCorporate Sustainability Reportによると、2019年には計1,075名（グローバルベースにおけるLSEG社員の20%相当）の社員がボランティア活動に参加しており、LSEGによると、目標参加率を達成しているとのことで、さらに、チャリティ活動に参加する社員に対しては、年間最大2日間の「ボランティア休暇（有給）」が付与される仕組

みもあるとしている。

■ 4. おわりに

本稿においては、英国社会を席卷したトム・ムーア氏による募金活動を紹介しつつ、LSEGのチャリティ活動等に関する概要紹介を行った。冒頭にも記載のとおり、日本と英国においては、チャリティに対する歴史や、両国市民の考え方なども大きく異なっているようにみえることから、こうした点を踏まえると、チャリティに関する両国比較を簡単に行うことはできないものの、英国におけるこうした動向は、英国の企業ビジネスにも大きく浸透しており、日本企業が英国ビジネスを行う際においても何かしらの参考にはなるものと思われる。JPXロンドン事務所においても引き続きこうした調査活動等も継続していきたいと考えている。

追記したものである。このため、内容の正確性については万全を期しているものの、その内容について保証するものではない点があることをあらかじめご了承ください。

(注5) LSEG Foundationサイトに掲載されているチャリティ団体について掲載（英国分のみ。2020年5月時点。）。

(注6) LSEG傘下にあるBorsa Italianaについては、LSEGによるRefinitiv買収に伴い、2021年上半期中にEuronextへと売却されることが決定されている。

(注7) このほか、LSEG Foundationには拠出しない形での、チャリティ団体に対する直接支援も13万ポンド（2019年：日本円換算約1,900万円）行われている。また、LSEGとしては、このほかにも、チャリティ団体のイベント等に対するLSEG内施設の貸与や、LSEGの役員がBoard of Trusteesのために費やしたコスト、さらにはLSEG内のチャリティ担当部門が費やしたコスト（Management Costs）についてもあわせて算出が行われている。



(注1) 1ポンド148円として計算（以下の為替計算において同様。2021年3月2日の為替レートをもとに計算）

(注2) <https://www.justgiving.com/fundraising/tomswalkforthenhs>

(注3) LSEG Corporate Sustainability Report (2019)
<https://www.lseg.com/sites/default/files/content/documents/LSEG%20Corporate%20Sustainability%20Report%2031%20December%202019.pdf>

(注4) 図表中のチャリティ支援先（英文）の横に記載した日本語コメントは、チャリティ支援先の理解を深めるために、筆者が把握する内容をもとに